

敗戦後70年 今、伝えなければならない

「満蒙開拓(移民)」の歴史

—その実相と我が家の足跡—

須田 一彦

一、我が家の満洲行き —父の決意

「在滿教務部に出向を命ず」、教師をしていた父がこの辞令を手に、刈羽郡中里村（現・長岡市小国町）から満蒙開拓団として満洲へ出発したのは、昭和15年12月2日です。父（鉄造28歳）、母（ハマ子26歳）、私一彦（4歳）、妹茂子（2歳）、妹洋子（9ヶ月）の一家5人でした。遠方の満洲、酷寒と匪賊の襲来があるという満洲、親類たちは猛反対しました。しかし、父は満洲行きを決意します。昭和14年から15年頃、村には頻繁に召集令状が来て、村の男たちが次々と出征して行きました。明日はわが身かと思うと眠れない夜が続

いたそうです。当時、満洲では教員は基幹要員として召集が無かったという事もあって、一家を守るために満洲行きを決断したようです。

日本から満洲への移民送出は、満洲国が建国された昭和七年から昭和11年頃までは、中国人の「抗日」運動が激しかったので、武装移民（独身軍人）でした。その後、日中戦争・支那事変が始まる昭和12年に政府は「百万戸、五百万人移民計画」を発表します。これに伴い満蒙開拓移民の数は、昭和16年のアジア・太平洋戦争勃発まで飛躍的に増大してゆきます。

当時、満蒙開拓団の送出は、各部落に「送出予定数」が割り当てられ、その「達成率」が強く追求されていた

た。新潟県の達成率は、初期の二―三回を除いて、40%から50%で、各部落はその送出者の人選に苦勞していましたが、昭和15年には10%台にまで落ち込みます。

この昭和15年12月に、父は満洲行きを決意します。年末まで送出者ゼロだった法坂集落では、鎮守様で盛大な壮行会をしてくれました。総代の山崎金作さんから「日支の間に戦雲益々漂うこの時、自ら進んで大陸に進出しようとする勇氣と壯圖に感激するものであります。須田家の限りの発展とご多幸を心から祈ってお送りします」と激励の言葉をいただきます。

家族5人は下関を出航して、朝鮮の釜山に上陸し、京城―平壤―と朝鮮半島を北上し、奉天―新京を通り、父の赴任地に着いたのは12月15日でした。

二、人々はなぜ満洲へ行ったのか

―どんな人々が

昭和初期から20年の戦争終結まで、日本は「草の根の軍国主義」体制でした。満洲に駐屯する関東軍の暴走は、張作霖爆殺事件、満洲事変と満洲国建国、国内では5・15事件、2・26事件、そして日中戦争と南京虐殺事件へと続きます。さらに国家総動員法、日・独・

伊三国軍事同盟、大政翼賛会、紀元2600年式典など戦争体制に突っ走っていきました。加えて、皇国農会、愛国婦人会、商業報告会、皇民教育など、ある意味で国民の気分が高揚していった時代でした。したがって、満洲への「侵略」も「満蒙は日本の生命線」と勝手に「正当化」し、流れに乗り遅れるなという「バス理論」が世の中を支配してゆきます。この「軍国主義体制」と「戦争支持」戦意高揚の雰囲気を作り上げていったのは、「教育」(教育勅語・修身)と「報道」(新聞、ラジオの戦意高揚報道方針、軍・財界との癒着、営利主義)が大きな力になっていました。

満洲へ行った人々(どんな人々がなぜ・・・)

- ① 関東軍―50万人。「先人の血と汗で勝ち取った満洲」を外国に渡せない。権益の保全を死守するために。
- ② 開拓団―27万人。関東軍の「人間の盾」「生きた案山子」「食料提供者」としての役割を負って。
- ③ 青少年義勇軍―8万人・開拓団員の補充要員として、北辺へ配置された。

④ 「農村疲弊救済策」移民―昭和初期の農村恐慌、余剰人口、二・三男対策、55%が未開地の満洲へ「農業移民」として。

⑤満洲経営の要員として―中期以降は「転職」して開拓団員として行き、満洲経営の担い手として。

⑥教育と自由をもとめた人たち―劣悪、遅れた教育環境、治安維持法、弾圧・検挙などの中で解放を求めて。

三、敗戦までは、幸せだった開拓団の生活

父の任地は吉林省盤石県。最初は小城在満国民学校（岐阜県郡上郡送出）、昭和18年5月から同じ吉林省の興隆川在満国民学校（東京都送出）に転動します。私はこの学校で小学校1年生に入ります。この学校は日本人だけの学校で、高等小学校までで全校一〇〇人ほどでした。

ここでの私たち一家は、不自由でしたが幸せだったと思います。360度の草原、地平線まで続く鈴蘭畑、高いひまわり畑と高粱畑。氷点下30度の冬でも、雉獲りやスケートで終日遊びまわり、夏は用務員の王さんと満洲馬で草原を走り回っていました。満洲豚小屋の泥掃除を賑やかにやったり、放し飼いの鶏が産み落とした卵を妹たちと夕方拾い集めたりする、幸せな生活が続きました。

「赤い夕陽の満洲」という言葉があります。地平線

から出て地平線に沈む満洲の太陽は、沈む前45度位から大きく真つ赤になり音をたてるように沈みます。沈むとすぐに真つ暗になり急に気温が下がります。この「赤い夕陽」は、国策とは言うものの夢を抱いて渡満した人々が、敗戦時からの運命を象徴するような太陽だったのだと思います。

四、開拓団の二つの立場

―「被害者」と「加害者」

日本人の「生活が幸せ」だっただけ、現地人の「生活は不幸せ」だったのです。8月15日の日本の敗戦から、力関係が逆転しました。恨みが重なっていた「強い憎悪」は、逆襲となって開拓団に襲いかかることになります。

現地人が開拓団をどう観ていたかの記録を中国の学者が残しています。それによれば、次のようです。

1、開拓団は軍と一体の「侵略」者だった。武力によって領土を拡大し、人民を支配した。

2、戦後の日本人の回想文には、中国人を「暴民」と描いたが「加害」の文章はない。

3、中国人による日本人への「報復行動」（暴民）は

度が過ぎたが、先祖伝来の土地と住居を他民族から強奪され、毎日殴られ、「豚」と呼ばれ、虐殺された同胞が、突然報復の機会が来たとき、その行動を抑制することができたらどうか。

4、関東軍は、「中国人は戸籍なし、捕虜は殺害しても可」と陸軍兵学校の戦闘法で教えていた。

《開拓団の二つの立場》

開拓団には、「被害者」と「加害者」としての開拓団の二つの立場がある事を忘れてはならないと思います。

・「被害者」としての開拓団

満洲国総務庁次長古海忠之は、戦後逮捕され監獄の窓から、外を通る避難民をみて「これら開拓団の人々は国の犠牲者である。国のためと言われて渡満し、国防の一助として国境に入植し、最後には国民を守る日本軍から見捨てられ、悲惨な境地に追い込まれ、生命までも失った」と書いています。

・「加害者」としての開拓団

関東軍（日本）は中国人に何をしたのか。

最初に手つけた事は現地人から「土地権利書」の取

り上げです。この権利書の取り上げは、「満蒙拓殖公社」の役人と「関東軍移民部」の兵隊が常に同道し、屋外での威嚇射撃が行われる中での強奪でした。また、住居の立ち退きも強要され、僅かの立ち退き料（5円・現在の2万円程度）で彼らは住居を去らなければならなかったのです。その結果、現地の人々は、小作人になって日本人の地主に小作料を納めるか、日本人地主の作男になるか、未開地へ追放されるか、匪賊（抗日勢力）になるしか道はなかったのです。

歴史の事実として、このようにして「確保された土地」に開拓団は入植して行つたという事です。日本で「満洲へ行けばただちに20町歩の地主になれる」と宣伝した通りでした。したがって、「満蒙開拓」はソ連国境のごく一部の例外を除いて、武力で制圧した「侵略移民」でした。この点ではブラジル移民やハワイ移民と全く性格が違っています。

また、日本軍隊の方針は、物資は「現地調達」が原則でした。これは現地人からの徴発・掠奪を意味します。したがって、日本軍隊の戦闘・侵略行為は世界に例を見ない残虐さを持ち、この日本軍に侵攻された現地人の被害は、言語に絶する状態になりました。

五、関東軍の暴走と満州国の建国

・関東軍の暴走

明治末から南満鉄道の警備隊として駐屯していた約1万人の日本軍は、大正7年関東軍に編成されます。この関東軍が満洲への進出を急ぎますが、それは、当時の世界情勢が①蒋介石の中国統一の動き、②ソ連の南下の気配、③「中国に手を出すな」という国際世論があったためです。

この関東軍が、日本政府と関東軍中央の指示命令を無視して暴走し、この軍の一定の「成果」を政府が後追い承認することにより、さらに暴走の悪循環が続きます。張作霖爆殺事件（昭和3）に始まるこの軍の暴走は、満洲事変（昭和6）を勃発させ、数ヶ月で満洲4省を支配下に置き、「満州国」の自主独立（昭和7年3月1日）を宣言させ、日中戦争・支那事変（昭和12年7月）、南京虐殺事件（同年12月）へと暴走が拡大してゆきました。

・満州国の建国と支配体制

満洲事変により中国東北部4省（黒竜江、吉林省、遼寧省、少し遅れて内モンゴル地区の熱河省）を支配下に

おいた日本は、「満州国建国宣言」を、3省の首領により発表させます。日本の関与に対する欧米の批判を想定し、中国人自らが「南京政府」から独立したという偽装です。皇帝溥儀を擁立しましたが、関東軍司令長官が全ての権力を握り、役人の7割が日本人という傀儡政権（昭和20年まで13年間の幻の国）でした。

この時代、満州国産業部次長として、「満洲人脈」（関東軍、新興財閥、特務機関）と結合し、侵略戦争推進の中心人物だったのが、岸信介です。安倍晋三はこの祖父を、政治の羅針盤と仰ぎ、「祖父の時代は栄光の時代だった」といいます。

六、満蒙開拓団の送出状況

昭和12年日中戦争の勃発とともに、満蒙開拓団の数は増大してゆきます。昭和12年政府は向こう20年間に「100万戸、500万人移民計画」を発表します。当時の日本の農家戸数の約2割を送出し、満洲で20年後に想定される人口5千万人の約1割を占めたいという計画です。昭和7年からの「屯墾兵」（独身軍人）を「開拓団」と改名し家族移民を中心にします

全国から300を超える開拓団、35万人の移民が終

戦まで送り出されますが、内訳は開拓団27万人、青少年義勇軍8万人。送出県と人数は、1位長野(3万8千人、12%)、2位山形(1万7千人)、3位熊本、4位福島、5位新潟、6位宮城、7位岐阜です。

長野県が多いのは、典型的な養蚕県だった長野県が昭和初期の世界恐慌により絹の輸出が不振になったことと教育団体「信濃教育会」がある時期から国策協力になり、子弟の送り出しに力を入れたことによりです。

新潟県は五位で65開拓団、1万2千651人、開拓団4345戸、9361人、青少年義勇軍3290人を送出し、最終死者は4980人(40%)になっています。

この送出に当たって、新潟港が大きな役割をはたします。当時、満洲への送出港は、新潟、敦賀、下関でしたが、昭和6年上越線の開通により、上野―新潟―羅津―奉天―新京が最短距離になり、時間が短縮された(12時間)ことによりです。

したがって新潟港からは、全開拓団送出の6割、16万人が送り出されました。新潟の街には丸に満の字の腕章をつけた人々が沢山歩いていたとか、現在の伊勢丹の近くに豪華な「新潟満蒙開拓館」が設立され、2

30人が宿泊できたという記事が残っています。満洲移民は大まかに3期に分けられますが、第1期(昭和7~11)は独身軍人・武装移民、第2期(昭和12~15)は開拓団・家族中心の最盛期、第3期は(昭和16~20)開戦により送出が減少してゆきます。

七、敗戦と我が家の逃避行

「棄民」された開拓団

①敗戦と深夜の逃避行

昭和20年7月13日、父に召集令状が来しました。

南方の戦況不利で関東軍が移動し、ソ連国境の警備強化のため、在満男子25万人が「根こそぎ動員」されたのです。日本の敗戦一ヶ月前です。父は朝早く、私達が寝ている間に出て行きました。母だけが城壁の門の外で、姿が見えなくなるまで見送ったそうです。

8月15日の敗戦を境にして、日本人と中国人の力関係が逆転します。長い間日本人に強い憎悪を抱いていた現地人が、日本人を襲撃したのです。

私たち開拓団が日本の敗戦を知ったのは、8月17日午後。18日午前、開拓団本部から「満人が暴動を起こす」という情報があるので移動する。午後3時まで開拓

団本部に集合せよ。持ち物は、おにぎりとおムツ、水、その他の物は最小限に」という連絡が入ります。

午後団本部に集結した私たちに悲しいニュースが入っていました。近くの開拓団、王化街（ワンチャガイ）部落全員が集団自決して果てたというものです。生きる希望を失った部落の人々が、丹念に目張りした家の中で、大量の炭を燃やしガス中毒をはかり、一人残らず死んでいったという痛ましい出来事でした。日本の敗戦の2日後には、すでに満洲で集団自決が始まっていたのです。

私たち興隆川開拓団650名は、暴徒に見つかると怖れて、暗くなった午後の5時ごろから逃避を開始します。兵隊のいる明城（30〜40キロ先）めざし出発しました。男たちの居ない開拓団は、大八車に子どもを乗せて馬に引かせ、歩ける者は後に続けました。標高4〜500Mですが、現地人が交易のため、馬車を引いて行き来する山道です。その山道に私たちは踏み込んだのです。

出発してから2時間くらい経ったころ、ぶちまけるような大雨になりました。移動は止まりました。真っ暗な斜面の山道、馬を励ます鞭の音、親子が呼び合う

声、叱る声、まさに地獄の様相を呈してきました。

立ち往生していた開拓団に、「明城の兵隊さんは移動してもういない」という情報が入ります。ここで、松川団長は最後の決断をします。全員の自決です。「こうなつては生きる道は無い。潔く自決して、東京開拓団の花と散ろう」という伝言が伝わってきます。父がいらない私たち子どもは、母の顔を下から必死で見っていました。母の背中には、さっきまでの雨は止んで溢れるような星が輝いていました。私は胸の中で「何でー何でー」と叫んでいました。

結局、団のお年寄りの強い反対で、この自決は取り止めになりました。「親の手で子どもを殺せるものか」「もとに戻ろう。死に急ぐ事はない」と、この瞬間に650名、興隆川東京開拓団の運命が変わったのです。

何時間もかかって朝がた、もといた団本部に戻ってみると、建物は原住民に掠奪され、雨戸一枚もないほどになっていました。応急処置で女・子どもは寝る事が出来るようにしましたが、それからは男たちは交代で夜警にあたる事になります。

夕方になると、現地人が私達の住宅の周りを遠くでうろつき始めます。夜警の人達の「来たぞー」という

声で、一斉に裏山に逃げ込みます。私は母と一緒に逃げたはずなのに、はぐれてしまい、よそのおばさんが一緒に居てくれて「大丈夫だよ、大丈夫だよ」と言ってくれました。

ある明け方には、鎌をふりあげた暴徒に捕まり「ここで死ぬのか」と息が止まったこともあります。母は逃げる時のリュックに終戦前に亡くなった愛子の位牌を入れていましたが、このリュックも逃げる途中に藪の中に置いてきて、取りに行くことができませんでした。母はそれをいつまでも悔やんでいました。

②関東軍の南下と集団自決、父のシベリヤ連行

関東軍と満鉄職員は、8月9日のソ連侵攻前に南下します。「満州国の4分の3を失っても、通化（皇帝溥儀の出身地）を死守する」という口実です。関東軍は自分達が通過後、ソ連の追撃を遅らせるため、鉄道を爆破してゆきました。開拓団の人達は見棄てられることになりました。

それまで一体だった関東軍に「棄民」された開拓団はあちこちで集団自決をしてゆきます。国策で開拓団として移住した多くの日本人が、前途に希望を失い、望郷の涙に咽びながら大陸の地に果てたのです。

わたしたち開拓団の幹部も連日引き出され、翌朝戸板に乗って帰って来ましたが、私には真つ赤な肉の塊が唸っているように見えました。

父は敗戦になり一度私達家族の元へ帰ってきますが、ソ連の「軍籍にあった者は出頭せよ」という命により、家族から離れます。そして関東軍の備蓄物資運搬作業、航空燃料の運搬作業、豊満ダムの解体作業のあと、シベリヤに連行され使役につきます。

シベリヤでは、森林の伐採と鉄道敷設作業の使役の中で、酷寒と食糧不足から、仲間が次々と死んでゆきます。死んだ人達の衣服を脱がせて着たとか、その日のために掘っておいた深い穴に裸同然の仲間を埋めたそうです。

③収容先（映画館）での生活、春子と征夫の死

私たち開拓団は9月に吉林市内の映画館に収容されました。映画館の座席にいる私達の食事は一日二度、とうもろこしの粉を薄く伸ばしたものを焼いたもの1枚と水のみ。寒さと飢えと不衛生から幼い子たちは次々と死んでゆきます。亡くなった子どもたちは、映画館の前庭に埋められました。またたく間に子どもたちの土饅頭で、隙間がなくなりました。

我が家でも幼い春子がいましたが、ここで麻疹になります。食べ物を欲しがる春子に母は何もすることが出来ず、9月18日早朝、母の腕の中で1歳6ヶ月の短い生涯を終えました。その春子をやっと見つけた空気に埋めました。母は春子が寒いだろうと自分の着ていた上着を脱いでかけてやりました。一本の線香も一本の花もない淋しい終わりでした。

この年の11月に征夫が生まれました。しかし母は心労と疲れて母乳の出ない状態でした。征夫は栄養不良で1ヶ月後の12月27日深夜死にました。32日の生涯でした。寒い電気も無い暗い部屋で、外からの明かりに照らされる征夫の遺体をいつまでも見つめていた母の姿を、私は忘れることができません。

④昭和20年の冬 ― 一家の生活、父の脱走

父のいない一家を必死に支えてくれたのが母でした。朝早くから現地人の家に行き洗濯や家事をさせてもらい、夕方わずかのお金を貰って、高粱や大豆を買ってきて私達に食べさせてくれました。

私は長男だったし父が留守でしたから、朝早く仕入れた大福餅を20個ほど肩に下げて寒さに震えながら「大福餅買ってください！」と日本人の家を回りまし

た。私も7歳と5歳の妹も、その大福を食べたいと一度も言わなかったと、母は後で涙ながらに話していました。

このようにして敗戦20年の冬をすごしていた頃、父は周到な準備をして、シベリヤからの脱走を開始していました。現地に雇ってもらい、かくまってもらう状態を続けながら、3ヶ月掛かって私たちの居た満洲に戻ってきたのは1月下旬の朝でした。奇跡でした。

⑤帰国―21年8月―10月

日本の敗戦から1年後・昭和21年8月から帰国事業が始まります。私達一家も、内地に引揚げするため、渡満して生まれた3人を大陸の地に残して、住んでいた吉林から港のある胡蘆島めざして移動を開始します。

帰国者に用意された列車は、屋根も囲いも無い材木運搬用の無蓋車でした。男たちが材木で囲いをつくり、女達は布で屋根を作りました。走り出した汽車も運行は全くあてにならないもので、食べ物はまだたく間に無くなりました。土砂降りの雨が屋根から漏って、ぐしょ濡れになりながら床にしゃがみ込んでいました。そんな旅を10日も続け、港に着いたのは8月22日です。胡蘆島で翌日船に乗りました。船はアメリカの戦車

を運ぶ上陸用舟艇です。5千トンの船底に数百人の引揚者はごろごろ寝ていました。

四日後、佐世保港に着きましたが、検疫でコレラ保菌者が発見され、上陸禁止になり、船は港外で1ヶ月隔離されます。マドロス姿の慰問団が来て、「異国の丘」や「リンゴの歌」を聴かせてくれました。

佐世保から3日3晩走り続けた引き揚げ専用列車が信越線の塚山駅に着いたのは、昭和21年10月1日の午後3時です。雲一つない晴れでしたが、風のとても強い日でした。黄金色に輝く稲が眩しく、その美しさは忘れることができません。昭和15年12月渡満してから丸6年が経っていました。

八、満蒙開拓とは何だったのか

— 今、歴史から学ぶ

1、「満蒙開拓」は「領土の拡大」と「民族を支配」した紛れもない「侵略」だったのです。

2、「満州国は日本の生命線」と煽って国策で送り出したが、国は最後は「棄民」したのです。

3、国民を煽ったマスコミ報道とその責任は大きい。今、報道機関の姿勢と「独立性」が厳しく問われな

ければならない状態が続いています。

4、教育・教師の責任は重い。今、「道徳」の国定化、大学への干渉が強まっています。

5、間違った為政者に抗し切れなかった国民の側の弱さ。今、「世論」が国を動かす確信を持ち、「選挙で勝負」「国民投票」を視野に運動をさらに進めなければなりません。

6、暴走する軍を押さえ切れなかった政治の弱さ。今、「制服組」の暴走が明らかにされてきました。

終わりに

「本当はあの時死んでいたかもしれない」と私は思います。愛子、春子、征夫の三人が「私たちも、兄ちゃん達と一緒に日本に帰りたいよ」「もうこんな時代には二度としないでね」小さな胸で叫んでいる声が私には聞こえるのです。

私は安倍首相に聞きたい

「満洲の凍土に置き去りにされた幼いきょうだいが、私たちを呼ぶ、悲しい泣き声があなたに聞こえますか」「祖国の親兄弟を想い、望郷の涙にむせびながら集団自決していった開拓団の人達の、怒りと悔しさがあな

たに分かりますか」

「あなたがこの道しかないというその国は、誇りを持って孫子に渡せる国ですか」と。

戦争の現場を知らない、安倍首相に何がわかるか、と。

2015年9月18日、安倍自公内閣は参議院で国民の意思を無視して憲法違反の『戦争法案』を本会議で強行採決をした。その朝、国会前は「戦争法案反対」「安倍政権倒せ」の声が渦巻いていた。

「違憲法案」「いつでも、どこへでも、アメリカの要請で世界中に自衛隊が出兵し、戦争する国」にする安倍自公内閣の暴走に、戦後史に残る国民運動が発生した。日本のほとんどの憲法学者、弁護士、歴代内閣法制局長官、文化人、大学の教授と学生たちはかつて無い闘いを創り上げ、ママさんたちも若い人たちも立ち上がった。

敗戦後70年、日本の民主主義は草の根で生きて育っていた。8月30日には、国会を12万人が包囲し、全国1千箇所で行われた。各政党は、党の存立を賭けてその闘いの先頭に立った。

採決後も、国民の間に挫折感はない。このたたかい

の中で大きな希望を国民が見出したからだろう。

「民主主義とは何だ！これだ！」と立ち上がり、「平和に観客席はない！」と動こうとしている。

強行採決後も、この暴挙に対し、戦争法反対行動が連日続いている。「これからも闘いぬく」「私たちが政権をとる」「これで終わったと思うな」「次ぎは選挙だ。賛成した議員を落せ」と全国で響いている。

日本共産党は採決直後、「戦争法廃止」と「閣議決定」を撤回させる「国民連合政府の実現を目指す選挙協力」を5党1会派と国民に呼びかけた。『オール沖縄』のたたかいに学び『オールジャパン』のたたかいを呼びかけた。心ある多くの人々から「待っていた提案」と歓迎されている。各野党の動向が注目されるが、なによりも国民の圧倒的支持と運動の盛り上がりが見え始める。

「立憲主義」を破壊する「安倍自公独裁政権打倒」を目指す、歴史に残るたたかいが展開されるだろう。

(すだ かずひこ・阿賀野市)